

世界の言語研究と女性

れいのるず = 秋葉かつえ

言語と性差研究 — 言語における性差・性差別についての女性学的な研究 — は、60年代から70年代にかけて広がったアメリカの女性解放のなかで誕生した。「国連婦人十年」に象徴されるように、60年代の女性解放運動は世界中に広がり国際的な規模で展開された。言語と性差研究も、少なくとも、前提においてはこれに呼応していた。直接的には欧米言語、特に、アメリカ英語を対象とせざるをえなかったが、言語における性差と社会的な性差別との関連を普遍的に理解しようとする指向はあった。「私の主張の大部分は、英語を話す大多数一般にあてはまることであって、実際、必要な変更を加えさえすれば、すべての言語に普遍であるという感じは強くもっている」（5－6頁）というロビン・レイコフ（1975）のことはにもそれが明らかであるし、アン・ボーディン（1975）のように言語における性差を普遍的に研究するための概念装置を提案した研究もあった。しかし、賃金格差とか、雇用／労働条件における差別が文化的な違いを超えて誰にでもすぐそれとわかるのと違って、言語の性差別性となると、自分の話している言語のそれでさえ見えにくい。外国語における性差別に関しては、専門家の研究を通して理解するしかない。言語と性差研究が女性運動全体の中で特異な位置を占めているのもそのためであろう。日本語なら日本語という特定の言語の研究者が、どの言語にも共通して言えること、言語性差の普遍性を踏まえながら日本語という言語における性差の特殊性を解明していく、それを逆に普遍理論に還元していく。言語と性差の研究者は、そういう形で国際的に関わっていくことを要請されているのではないだろうか。アメリカで生まれ、欧米言語圏に広がっている言語と性差研究をそのような観点から見ておきたい。

言語性差の研究と女性運動

英語が性差別的だという声は、フェミニズム第二の波が高まり始める以前

からあった。たとえば、自分自身をどう呼ぶかという名付けの問題は言語の問題でもあるわけだが、女性たちの結婚改姓反対の運動や論議（＝日本でいう「夫婦別姓制度」を進める運動）は、19世紀からすでにフェミニストたちの間でおこっており、1921年には「ルーシー・ストーン連盟」という結婚改姓反対の運動組織もできている²。第二次世界大戦後、doctor という語が男性の医師だけを意味して使われていることに女性の医師たちが抗議をはじめなど、英語の性差別性に対する気付きは常に女性たちの間にあった。

しかし、desexing とか degendering（脱性差化）という言葉が生まれ、英語から差別をなくしていく運動が組織的になってくるのは、なんといっても60年代の女性解放運動からである。60年代の女性解放運動は、それ以前の運動とちがって、言語を中心とする文化の変革を重視し、「言語における性差別は性差別そのものだ」ととらえていた。1966年秋、正式に発足したNOW（全米女性機構）は、その目的声明文で「女性の人間としての尊厳をまもるために、現在メディアや文書、儀式、法律、その他の主な社会制度の実践に一般に通用している女性についての誤ったイメージに抗議し、それを変えていくよう努力する。そうしたイメージのために女性はいつまでも社会から蔑視され、女性自身が自分を劣等視することになるのだ」とうたっており、英語の脱性差化を暗示している。1967年のNOWで行われた初代議長ベティ・フリーダンの報告演説も言語に関する問題に触れている。

70年代に入ったころ、全国の大学でウイメンズ・センターが創設され、女性学が開講されるようになった。言語と性差研究も、そうした大学組織の再編成の中で急速に顕在化していった。言語と性差研究が大学の正式な講座として最初に登場したのは、カリフォルニア大学アーヴァイン校でマリー・リーチ・ケイが行った「男と女の言語行動」であったようだ。他の大学に噂が伝わって、シラバスや文献リストが欲しいという要望があいついだという。その講義録は1975年『男／女ことば』となって出版された³。同じころレイコフの活躍も始まっている。1971年には、行動科学研究センターに迎えられて女ことば研究を行っており、その結果が1973年社会言語学研究誌 *Language in Society*（社会のことば）に「言語と女性の地位」というタイトルで発表

された。翌年1974年の『ミズ』誌にそのポピュラー版 You are what you say(あなたのことばづかいがあなたを表す)が掲載され、「女ことばで自信なさそうに話していると、本当に自信がない、だめな人間だと評価される」という警告めいた主張が大きな波紋をなげかけた。1975年には、レイコフの研究は『言語と女性の地位』という単行本にまとめられた。同じ年にベリー・ソーンとナンシー・ヘンリーの言語と性差研究参考文献目録付きの論文集『言語と性 ― 性差と支配』が出版され、たたき台とも言うべき本が三冊そろった。これによって、言語と性差研究は、まさに順風に帆を上げて走り出すことになったのである。1975年以後の言語と性差研究は、ほかでも書いたが、「爆発的」とでもいうよりほかに言いようがない。

言語性差の研究と「女ことば」

言語と性差研究は、既成の学問区分を超えた学際的な研究活動で、言語の形式、それを使つての相互作用、その根底にある認識活動まで、人間のコミュニケーション活動のほとんど全域を研究の対象にし、女たちの無意識にまで探りをいれる。そこでは、いわゆる「女性原理的な」現象のすべて（この意味で「女ことば」ということばが使われることが多い）が分析の対象になり、研究結果はただちに研究の仕方そのものに取り入れられ、実践されていくという具合だ。それが言語と性差研究を支えていくエネルギーにもなってきた。

1981年から82年にかけて私はスタンフォード大学に客員でいたが、その年、「ベイ・エリア言語と性差研究グループ」が発足した。各月の集会は午前10時から午後4時まで、サンフランシスコ湾周辺の大学から20-30人の研究者が集まり、報告、情報交換、ディスカッションが続いた。そのころすでに「異性間会話では男がトピックや順番取りを支配し、女は言いたいことが言えない」という研究結果が出ていたから、このグループも「女性同士の話し合い」の形をとった。リーダーのいない、女性だけの、「ひら場」のディスカッションである。外国人というハンディをもつ私がまがりなりにも体制にからめとられずに言語と性差研究を続けてこられたことについては、この時の「女縁」に負うところが少なくない。

女たちに「男のようにはっきりと自己主張ができるようになれ」というレイコフの主張は、「女同士の話し合い」の価値を発見したフェミニスト研究者たちから激しく批判された。「女同士の話し合いは同情的で相互支持的で人間的だ、男こそ女のように話せるようになるべきだ」と。この立場は、競合的な男社会のルールを習得した女性たちが他の女を踏み台にして男社会入りしていく風潮に釘をさすものとして有効であった。しかし、社会全体を女性化するというような変革は現実に無理である。たとえ可能であったとしても、それがより豊かなコミュニケーションにつながるとはかぎらない。ことばは、その場の情況、目的に応じて、自己主張的でなければならなかったり、相手本位でなければならなかったりする。仕事の性別役割分担が相互に流動化すれば（今のところ、従来の男役割への女性の進出だけがすすんで、その逆が少ない）、女性にも明確で効率的なコミュニケーションが必要になることもあるし、逆に、男性が同情的、共鳴的なやさしいコミュニケーションのスタイルを要求される場面も出てくるはずだ。だから、「女ことば」それ自体が優れているとか劣っているという問題ではない。そこで、「女ことば」はどういう場面でプラスであり、どういう場面でマイナスになるかを分析することが言語と性差研究の新しい課題として浮かび上がってくる。

言語と性差についての研究活動を広げていく場合「女同士の話し合い」の場が多くなるのは確実である。そのプラス・マイナスをあらかじめ予測しておくことは、生産的な研究活動を続けていく上で大事なことである。相手本位のコミュニケーションは、言いたいことを間接的にしか言語化しない「斜めのもの言い」になりやすい。「女ことば」は気配りと思いやりで疲れるばかりでなく、誤解の幅が大きい。それが重なると、人間関係が修復不可能なところまで悪化する。社会学者たちの研究によれば、女性研究者のほうが共同で研究や執筆をする傾向があるというが、女同士の共同研究はうまくいなくて不幸な結果になることもまた多いようだ。もし女性の共同研究が男性のそれに比べて問題が多いとすれば、それは「女ことば」の相手本位が裏目に出る結果ではないのか。なぜ女性は共同研究を好むのか、なぜ女同士の共同研究が不幸な結果になりやすいのか。言語と性差研究は、言語使用の

コンテキストを十分考慮しながら、そういうメタ言語的な問題にも取り組まなければならないだろう。

フランス語、スペイン語、ドイツ語などの研究も、盛んになってきており、イタリア、オランダなどで言語と性差の国際的なコンファランスも開催されるようになってきている。日本の女性たちの言語への関心が高まってきているらしい兆しもみえる今、この集まりがもてたことは意味が深い。日本語と日本の女性、日本語研究と世界の言語性差研究、二つの関係軸が交差する言語研究の空間が拓けてくればいいと思う。

注 記

1. 「ルーシ・ストーン連盟」は、19世紀中頃に活躍したフェミニスト Elizabeth Cady Stanton にちなんで命名された。「私の名前は失われてはならない私自身のアイデンティティの象徴である」として、自分の本姓でマサチューセッツ州の選挙に臨み、投票を拒否された女性である。
2. Robin Lakoff. Language and Women's Place. New York : Harper, 1975. (日本語訳『言語と性』有信堂)
Ann Bodine. "Sex Differentiation in Language," in Barrie Thorne & Nancy Henley(eds.) Language and Sex : Difference and Dominance. Rowley : Newbury House. 1975.
3. Mary Ritchie Key. Male/Female Language. Metuchen, N.J. : Scarecrow Press. 1975.
4. Barrie Thorne & Nancy Henley (eds.). 注記2。
5. Dale Spender. Man Made Language. London : Routledge. 1980. (日本語訳『ことばは男が支配する』勁草書房)
6. Kathryn B. Ward & Linda Grant. "Coauthorship, Gender, and Publication among Sociologists," in Mary Margaret Fonow & Judith A. Cook(eds.) Beyond Methodology : Feminist Scholarship as Lived Research. Bloomington and Indianapolis : Indiana University Press. 1991.

(ハワイ大学)